

四国中央・関川地区「イヨクマガイ」

固有種の桜 繁殖に挑戦

丹原高校（西条市丹原町願連寺）の生徒らが、一時は絶滅の危機にあった四国中央市土居地域の関川地区に伝わる固有種の桜「イヨクマガイ」の繁殖に乗り出した。住民の依頼を受け、園芸科学科の草花班が独自に編み出した育苗技術に応用した挿し木での研究を進めている。

イヨクマガイはサトザクラの系統に分類されるニオイザクラの一種で、1本に一重と八重の花が混在するのが特徴。4月中旬に開花し、甘美な香りを放つ。1894（明治27）年刊の地誌「伊予温故録」では、イヨクマガイは上野村（現・四国中央市土居町上野）にあり、開花時季には近隣から大勢が訪れると記されている。前関川公民館長の寺尾晴志さん



桜守の河村さんの依頼を受け、独自の技術を応用してイヨクマガイの育苗研究を始めた丹原高の生徒

住民が保全 枝提供 西条の丹原高生 挿し木で育苗



関川地区固有の「イヨクマガイ」。一重と八重の花が混在し、花は散らずにしぼんで残る

（77）らによると、昭和30年代の旧土居町の広報誌にも「上野熊谷の桜」として取り上げられるなど、地域は名所として知られていた。だが、家の敷地に桜を植えると罰が当たるとの民話が伝わっていることも影響し、2003年には1本のみ。絶やすまいと、桜守の真鍋通晴さん（91）と河村友和さん（77）が自宅で丹精し、絶滅の危機を脱した。

丹原高では、2月に河村さんから提供を受けた約100本の枝を生徒6人が挿し木した。挿し木部分をビニールで密閉して湿度を上げ、発根率を高める「密閉挿し」の手法などを用いた。同校が長年取り組む菊栽培で培った技術で、桜への応用は初めてという。

発根率は約5%とまずまずで、同校の教育支援員飯尾和幸さん（69）は、根や葉を出すのは想定より簡単だったが、発根後の管理が難しいと説明する。研究を進めれば、発根率の向上や育苗技術の確立は十分可能といい、本年度は桜の特性などを観察し、再び挿し木する来冬に向けて計画を練る考えだ。

飯尾さんは「イヨクマガイがうまくいけば、県内各地域で地域住民に愛されている桜の保全にもつながる。住民の思いに応えたい」とし、草花班リーダーの3年長井朱怜さん（17）は「研究は先輩から引き継がれるのが伝統。桜の研究も後輩へ託し、研究成果を広めてほしい」と願った。（三津田媛琳）